



▲平成16年の洪水による浸水状況 (大洲市東大洲)



▲平成16年の洪水による浸水状況 (大洲市西大洲)

背景

平成16年(2004)8月の台風16号は、大洲市に1日の雨量の記録更新となる179mmの大雨をもたらしました。肱川の水位が上昇し、肱川橋では危険水位(現在は、はん濫危険水位と呼ぶ)5.80mを超える6.85mを記録しました。このため、大洲市では床上浸水73棟、床下浸水91棟という被害が発生し、住民約200人が避難しました。この話は、当時大洲市で住民に避難勧告に関する情報を伝える役割を担っているながら、思うように伝達することができなかった人の体験談です。

アクセス

無線設備が浸水した付近(逆なげ橋(肱川))

- JR伊予大洲駅より南東へ直線距離約3km
- 大洲市菅田
- 緯度経度 北緯33度30分22秒, 東経132度35分34秒



平成一六年(二〇〇四)の台風一六号による水害発生当時、私は防災行政無線により水位状況や避難勧告に関する情報を伝達していました。その日は朝方から強い雨が降り始めました。夕方になると雨は一段と強くなり、肱川の水位は急激に上昇しはじめ、警戒を要する水位には一七時ごろ達しました。その後も水位は想定以上の速さで上昇し、二〇時頃には、さらに一メートル四〇センチも上昇し、河川による氾濫の危険がある水位に達していました。

二〇時五〇分に市全域に自主避難勧告を発令することになりました。しかし、その時にはすでに予想を超える高さまで水位が上昇しており、上流の三地区で放送の前に無線設備が浸水してしまい、その地区に避難勧告の情報を周知、伝達することができなかつたということが、後で分かりました。

深夜一時に肱川の水位は最高となり、六メートル八五センチに達しました。警報施設は、平成七年(一九九五)の浸水実績を考慮して高さを決めていましたが、平成一六年の洪水はさらに一メートルも高く、戦後二番目の水位を記録しました。

今回一番考えさせられたのは、どうすれば災害に関する情報を早く正確に市民に周知、伝達できるかです。情報通信技術に依存する手段も考えられますが、やはり最終的に大切なのは、地区住民同士の共助の精神ではないでしょうか。区長や水防団の方々を中心に独居老人、障害者、子どもなど、どのような人がどのような場所に住んでいるかを把握し、情報伝達に関するネットワークづくりをしていくことが一番大切であると感じています。